
『共榮報』のマレー語における 形態法と統語法についての覚書

稲垣 和也

Abstract

This paper discusses the morphological and syntactic aspects of Malay used in *Kung Yung Pao*, a newspaper published from 1942 to 1945 in Java. *Kung Yung Pao* shows some non-standard features of Jakarta Malay spoken in Jakarta and its surroundings, such as the schwa in ending syllables, valency-increasing suffix *-in*, undergoer voice prefix *kě-/ka-*, adversative construction with *kěna*, and plural subject marker *pada*. In addition, it also shows non-standard features of “Vehicular Malay” (lingua franca variety of Malay) such as plural formation with *orang* ‘man’, demonstrative + noun word order, possessive phrase with linker *poenja* ‘have’, and continuative aspect auxiliary use of *ada* ‘exist’. This paper demonstrates each of these features through examples extracted from the pages of *Kung Yung Pao*. Their presence supports the conclusion that the language used in *Kung Yung Pao* is a Malay variety which is closely similar to Jakarta Malay.

1. はじめに

1942年3月5日からオランダ領東インド（現インドネシア共和国）の主都バタビア（現ジャカルタ）に日本軍が進駐する中、同年3月10日、同地で『新新報』という日刊の華語新聞が発行され始めた。これは、抗日的な『新

報 (*Sin Po*)』(=マレー語新聞として1910年に創刊。1921年より同地初の華語版を発行)が吸収された結果の「後継紙」にあたる。しかし、その発行開始わずか16日後の3月26日、『新新報』は『共榮報』(*Kung Yung Pao*, 華語版)へと置き換えられた。続いて、1942年9月1日、親日的なマレー語紙『洪報』(*Hong Po*, 1939年創刊)を吸収して『共榮報』マレー語版が発行され始め、これら華語版とマレー語版は共に1945年まで継続する(詳細についてはKwartanada 2010, 津田 2019bを参照)。

本稿が扱う『共榮報』マレー語版は、日曜日を休刊とする日刊紙であり、1945年9月15日の最終号まで、98号(1942), 306号(1943), 306号(1944), 218号(1945)の通算928号が発行されている(Tsuda 2020: 68-94を参照)。その復刻版が津田(2019a)として出版されている。テキストにはジャカルタ・マレー語(Jakarta Malay, Betawi Malay)に近い変種が使われており¹⁾、ジャワ生まれの華人記者達²⁾および“Pembantoe”「アシスタント」による記事が掲載されている。“Domei”(同盟通信)等からの配信にわずかな言語的改変を加えた記事や、執筆した記者のイニシャルが文責として末尾に付された取材記事³⁾、連載中国小説欄、広告欄などが見られる。

本稿の目的は、これまで詳細が検討されてこなかった『共榮報』のマレー語について、その形態法および統語法の一部を記述し、言語的にジャカルタ・マレー語に近い変種であることを確認することである。同時代に同じく日本軍政下で発行されていた*Borneo Simboen*(稲垣 2020 参照), *Pewartar Selebes*(稲垣 2021 参照)等のマレー語とは異なり、『共榮報』のマレー語には口語的要素、すなわち文語として標準化を被っていない要素が多分に含まれている。本稿では、このような口語的要素に焦点を当てつつ、その形態法と統語法について明らかにしたい。

形態と統語の要素について検討するため、第2節では、『共榮報』のマレー語の綴り字について現代との相違や異綴の有無等を交えてまとめておく。第3節では、主に動詞を形成する接辞を中心として形態法を考察する。第4節



図1：『共榮報』1942/10/1（初年度第25号）の題字部（津田 2019a）

では、複数性の標識，指示詞，所有句，助動詞の *ada* が関わる非標準的な構造を取り上げ，『共榮報』のマレー語の統語的特徴の一部を明らかにする。第5節において，本稿で得られた成果を総括する。

2. 綴り字

『共榮報』のマレー語は，同時代の出版物同様，旧綴りが使われており，/u/ は *oe*，/ɛ/ は *tj*，/j/ は *dj*，/ʃ/ は *sj*，/ñ/ は *nj*，/j/ は *j*，/h/ は *ch* で綴られる。同時代発行の *Borneo Simboen* や *Pewartas Selebes* に顕著な ' の記号は，母音連続の音節境界を示すために使われる場合がほとんどである（音素と綴り字との対応については稲垣（2020: 199–200）を参照）。

語句の中には綴りに一貫性がないものもあり，別の音との交替や音の変異を反映したのが見られる。異綴りによる意味の相違はほぼ見られない。異なる綴りが観察されるのは，複数の著者・編集者が関わっていることが理由の一つとして挙げられる。本稿では，記事の種類や著者による詳細な分類はおこなわず，『共榮報』という新聞を一つの複合的な体系と見なし，そこに含まれる交替・変異を一括して扱う。

2.1 母音

『共榮報』では、奥舌母音 *o* と *oe* (/u/) の交替が見られる場合がある。*o* と *oe* のうち、使用が多いのは現代インドネシア語とは異なる音の方である。例えば、現代インドネシア語で /u/ のものには通常 *o* が、同じく /o/ のものには *oe* が使われる⁴⁾。以下、劣位の形式を () 内に付記する。

- | | | |
|-------------|-------|----------------------------------|
| (1) a. daon | 「葉」 | (<i>daoen</i> , 1944/6/10 等) |
| b. gědong | 「建物」 | (<i>gědoeng</i> , 1943/10/13 等) |
| c. soeal | 「問題」 | (<i>soal</i> , 1945/4/5 等) |
| d. toeloeng | 「助ける」 | (<i>tolong</i> , 1944/11/6 等) |

前舌母音 *e* (/e/) と *i/ei* の交替が見られる場合がある⁵⁾。(1) の *o*~*oe* の交替と同様、現代とは異なる音の方を使うのが通例である。

- | | | |
|----------------|--------|---------------------------------|
| (2) a. měrdika | 「独立した」 | (<i>měrdika</i> , 1945/3/3 等) |
| b. kětjiwa | 「失望した」 | (<i>kětjewa</i> , 1944/1/15 等) |
| c. heibat | 「凄い」 | (<i>hebat</i> , 1944/5/27 等) |
| d. aer | 「水」 | (<i>air</i> , 1943/10/4 等) |
| e. baek | 「良い」 | (<i>baik</i> , 広告欄等) |

o~*oe* や *e*~*i/ei* の交替と同様、中舌母音にも交替が見られる場合がある。まず、/ə/ (ここでは補助記号を付し、*ě* と表記する) と /a/ のうち、通例 *ě* で現れるものを挙げる。

- | | | | |
|--------------|--------|-------------------------|---------------------|
| (3) a. dalěm | 「中」 | (<i>dalam</i> , 比較的多い) | [cf. alam 「(経験する)」] |
| b. akěn | 「(未来)」 | (<i>akan</i> , 比較的多い) | [cf. makan 「食べる」] |
| c. datěng | 「来る」 | (<i>datang</i> , 広告欄等) | [cf. batang 「~本」] |

- d. dapēt 「～できる」 (*dapat*, 比較的多い) [cf. rapat 「会議」]
 e. soekēr 「困難な」 (*soekar*, 1944/9/1 等) [cf. toekar 「換える」]
 f. sēdar 「気づく」 (*sadar*, 1945/1/19 等)

(3a-e) は、語末閉音節で ě が優勢な例だが、a で現れることも少なくない。ě で現れるものは、概ね、Adelaar (2018: 574-575) がジャカルタ・マレー語の第一の特徴とする「語末音節におけるシュワーの史的維持」にあたる⁶⁾。ただし、同様の音配列であっても、(3) で末尾に付したような語では ě による変異が観察されない⁷⁾。一方、(3f) のような、非語末音節において ě を通例とする語も見られる。

ジャカルタ・マレー語の特徴としてよく言及される、語末開音節の /e/ (Ikranagara 1980: 114, 131-134; Muhadjir 1981: 16-17; Grijns 1991: 16, 203-216, Adelaar 2005: 206; Chaer 2009) は現れない。代わりに a が見られる (例: apa 「何」, goela 「砂糖」)。

続けて、(3) とは逆に、通例 a で現れるものを挙げる。

- (4) a. ka 「～へ」 (*kě*, 比較的多い) [cf. kēna 「陥る」]
 b. sadjĕk 「～から」 (*sědjak*, 1944/9/8 等) [cf. djĕdjak 「足跡」]
 c. ampat 「四」 (*ĕmpat*, 1943/12/13 等) [cf. tĕmpat 「場所」]
 d. anĕm 「六」 (*ĕnam*, 1944/10/31 等) [cf. bĕnĕm 「(沈む)」]

(4) の語は語頭音節で a が優勢であり、(4a) の ka を除き、ě による変異はあまり現れない。この交替・変異の事例は、使用頻度の高い語に限られているようである。また、同様の音配列であっても、末尾に付したような語では a による変異が観察されない。

語末第三位の位置では、ĕ~a に限らず、ĕ~o, ĕ~oe, ĕ~i や a~i という交替が見られる場合がある。

- (5) a. marika 「彼ら」 (*měreka*, 比較的多い)
 b. kombali 「戻る」 (*kěmbali*, 比較的多い)
 c. koetika 「時」 (*kětika*, 1944/5/8 等)
 d. sig(ě)ra 「すぐ」 (*sěgěra*, 1944/6/19 等)
 e. agama 「宗教」 (*igama*, 木・日曜 21:30 のラジオ番組名等)

二重母音の ai/au は、それぞれ e/o との交替を見せるのが普通だが、語彙によっては i/oe との交替を見せる。また、ai については、ei と交替する場合がある。

- (6) a. sampe 「～まで」 (*sampai*, 比較的多い)
 b. sěbagi 「～として」 (*sěbagai*, 比較的多い)
 c. poelo 「島」 (*poelau*, 1944/7/20 等)
 d. kaloe 「～なら」 (*kalau*, 広告欄等)
 e. soengei 「川」 (*soengai*, 1944/6/24 等)
 f. pantei 「海岸」 (*pantai*, 1944/7/19 等)

i/oe は半母音としてそれぞれ j/w と綴られる場合があり、ialah~jalah 「～である」、koeasa-kwasa 「権力」、soemi~swami 「夫」などの変異が見られる。w については、oe + a の間に現れ、oewang 「お金」、boewat 「～のため」、djoewal 「売る」となり得るが、j が i + 母音の間に現れることはほぼない。また、majat 「遺体」はほとんどの場合 mait と綴られる。

(5d) の sig(ě)ra 「すぐ」で示したように、ě の省かれた変異がある。ほとんどの場合は語末以外の TěR-TR の交替だが (T= 閉鎖音, R= 流音), sěpeda~speda 「自転車」、sěpatoe~spatoe 「靴」のような阻害音間での ě の有無による変異も見られる⁸⁾。

- (7) a. *preksa* 「調べる」 (*pěreksa*, 1943/2/20 等)
 b. *měmbri* 「与える」 (*měmběri*, 比較的多い)
 c. *sěblah* 「方, 側」 (*sěbělah*, 比較的多い)
 d. *trima* 「受け取る」 (*těrima*, 比較的多い)
 e. *kreta* 「車両」 (*kěreta*, 1945/8/27 等)
 f. *klapa* 「ヤシ」 (*kělapa*, 比較的多い)
 g. *něgri* 「国」 (*něgěri*, 比較的多い)

以上, 舌の高低による o~oe, e~i, a~ě の交替をはじめ, 母音には相当の交替/変異が見られることがわかる。

2.2 子音

母音 ě と同様, 子音にもゼロ (∅) と交替する例が見られる。よく観察されるのは, h が省かれた変異である。まずは非語末位置の ∅~h の交替について, 劣位の形式を () 内に付記して提示する。

- (8) a. *abis* 「無くなる」 (*habis*, 比較的多い)
 b. *itěm* 「黒」 (*hitam*, 広告欄等)
 c. *taon* 「年」 (*tahon*, 広告欄等)
 d. *taoe* 「知る」 (*tahoe*, 広告欄等)

語末位置では, h が無いケースも少なくはないが, 語末に h を持つ変異の方がやや優勢のようである。これは, h はふつう語末に現れないとする Ikranagara (1980: 115) や Muhadjir (1981: 20) の記述とは異なる (cf. “Ciputat dialect”, “Pebayuran dialect”, Grijns 1991: 226, 233)。

- (9) a. *lěbih* 「より～」 (*lěbi*, 少ない)
 b. *soedah* 「(完了)」 (*soeda*, 少ない)
 c. *roemah* 「家」 (*roema*, 少ない)
 d. *djaoeh* 「遠い」 (*djaoe*, 少ない)
 e. *djatoh* 「落ちる」 (*djato*, 少ない)

また、高頻度ではないが、*těnagah* 「力」、*bedah* 「違い」など、語末の *h* が無いはずの語彙に *h* が現れる場合がある。特に、*bedah* はサンسكريット *bheda* (Jones 2007: 35) からの借用語である。このような、末尾の *h* の現れは、接辞添加においても見られる場合がある。

- (10) a. *kětjintahan* 「愛情」(1943/6/7 広告欄等) 語基：*tjinta* 「愛」
 b. *pěrasahan* 「感情」(1943/1/25 中国小説欄等) 語基：*rasa* 「感覚」
 c. *pěrkatahan* 「言葉」(水・土曜の短信欄等) 語基：*kata* 「語」

h の他、語彙によっては語末位置の *k* も省かれる場合がある。

- (11) a. *tida* 「～ない」 (*tidak*, 比較的多い)
 b. *bapa* 「父親」 (*bapak*, 1944/6/23 等)
 c. *roko* 「タバコ」 (*rokok*, 1944/5/16 等)

また、*sampi* 「牛」、*mangkin~mingkin* 「ますます」といった語彙で、語中閉鎖音の直前に同器官的鼻音の *m* や *ng* [ŋ] が挿入されている場合がある⁹⁾。逆に、語中鼻音の直後に同器官的閉鎖音 (*b*) が挿入された *joembla(h)* 「総数」のような変異もある¹⁰⁾。

鼻音のうち、語末の *n~m* の交替が見られる場合があり、*b(e)lon* (*~beloem*) 「未だ」、*moesin* (*~moesim*) 「季節」といった変異がある。その他、語頭の

w と b の交替による *watēs* (~ *batas/batēs*) 「境」という変異も見られる¹¹⁾。

アラビア語からの借用語では、元の咽頭化舌頂音 *d̥/s̥* [d̥/s̥] を *dl/ts* とし、歯摩擦音 *dh* [ð] を *dz* と綴る変異が見られる¹²⁾。以下、Jones (2007) に挙げられているアラビア語の形式とその該当ページを () に入れて付記する。

- | | | | |
|--------------|-----------------|-------------|--------------------------|
| (12) a. dl-d | <i>hadlir</i> | 「出席する」 | (<i>hādir</i> , p. 101) |
| b. dl-l | <i>ridla(h)</i> | 「喜んで (～する)」 | (<i>riḏā'</i> , p. 263) |
| c. ts-s | <i>hatsil</i> | 「成果」 | (<i>hāsil</i> , p. 104) |
| d. ts-s | <i>fatsal</i> | 「～条」 | (<i>faṣl</i> , p. 235) |
| e. dz~z | <i>idzin</i> | 「許可」 | (<i>idhn</i> , p. 131) |

その他、Adelaar (2018: 574-575) が挙げる、機能語頭の *s* の消失という特徴は見られない¹³⁾。加えて、音節末の有声閉鎖音 *b* や *g* (cf. Ikranagara 1980: 45, 95; Muhadjir 1981: 23; Grijns 1991: 18) も現れず、声門閉鎖音も表記されない。

3. 形態法

自動詞を派生する接頭辞 *bēr-* について、子音で始まる語基 (例: *kata* 「語」) に添加してもその派生語 (例: *bērkata* 「言う」) に特段の変異は無いが、(頭子音削除によるものも含め) 母音で始まる語基に添加すると、(7) で見た *TēR-TR* の交替のように、接頭辞の *ē* が削除される場合がある¹⁴⁾。以下、劣位の形式を () 内に付記する。

- | | | |
|-----------------------|--------|-------------------------------------|
| (13) a. <i>branak</i> | 「子を持つ」 | (<i>bēr-anak</i> , 1942/10/29 等) |
| b. <i>brēnti</i> | 「止まる」 | (<i>bēr-(h)ēnti</i> , 1945/8/22 等) |
| c. <i>brikoet</i> | 「次の」 | (<i>bēr-ikoet</i> , 比較的多い) |
| d. <i>bēladjar</i> | 「学習する」 | (<i>bladjar</i> , 1943/1/21 等) |

(13d) の場合, ě は削除されないことが多い。この *běl-* という形式は, 語基 *adjar* 「(教・学)」に接頭する場合にのみ現れる, 語彙的に条件づけられた異形態である。

別の動詞化接頭辞 *měN-* の *N* は, 語基頭の無声閉鎖音に同化して鼻音代償を見せるが, 語基頭の *tj/č/* に対しては鼻音代償を見せず, *měntj...* と実現するのが普通である。しかしながら, 『共榮報』の一部の語彙では *tj* に対して鼻音代償する場合が多い¹⁵⁾。

- | | | |
|-----------------------------|---------|---------------------------------------|
| (14) a. <i>měnjotjokkĕn</i> | 「適合させる」 | (<i>měntjotjokkĕn</i> , 1945/2/23 等) |
| b. <i>měnjatĕtkĕn</i> | 「登録する」 | (<i>měntjatĕtkĕn</i> , 比較的多い) |
| c. <i>měnjiptakĕn</i> | 「創り出す」 | (<i>měntjiptakĕn</i> , 比較的多い) |
| d. <i>měnjega</i> | 「防止する」 | (<i>měntjega(h)</i> , かなり多い) |

ジャカルタ・マレー語では動詞化接頭辞 *N-* (Muhadjir 1981: 23–25, 42–46 等) が知られており, 例えば *N-pandjang* [*N-*長い] は *manjang* 「延期する」, *N-gĕrgadji* [*N-*鋸] は *ŋgĕrgadji* 「鋸で切る」となる。『共榮報』では *N-* の添加例はほとんど無く, *měN-* や *měmpĕr-* が添加されるか, 何も添加されずに (*φ-*) 語基がそのまま動詞として使われるケースがほとんどである¹⁶⁾。

(14a–c) の末尾には, 適用接尾辞 *-kĕn* が添加している。*-kĕn* の母音は ě である (*e* ではない)¹⁷⁾。*-kĕn* と並ぶ他動詞化の接尾辞には, *-i* の他, Adelaar (2018: 575) がジャカルタ・マレー語の第五の特徴とする接尾辞 *-in* (Muhadjir 1981: 28, 50–56 等) もよく使われる。*-in* は使役的ないし非使役的な他動詞を派生する。以下の例は『共榮報』における受益, 道具, 位格的な用法を示している。

- (15) a. 接尾辞 -in : 受益「～のために, ～してやる」

soemi-nja tida mampoe beli-in barang (1943/1/19)

夫-3人称 (否定) (能力) 買う-IN 物

「夫には物を買ってくれる能力なんてない(と口をはさんだ)」

- b. 接尾辞 -in : 道具「～で, ～を使って」

di kantor oepatjara jang di-hias-in bendera

～に 事務所 式典 (関係化) (受動)-(飾る)-IN 旗

Nippon dan Tiongkok jang besar-besar (1942/9/25)

日本 ～と 中国 (関係化) 大きい-大きい

「日本と中国の大きな旗で飾られた式典事務所で」

- c. 接尾辞 in : 位格的「～に」

koetika saja hendak menanda-tangan-in Perdjangjian Umezu Hoy In Ching

時 私 (意志) 署名する-IN 協定 梅津・何応欽

「私が梅津・何応欽協定に調印しようとしていた時」 (1943/3/31)

(15a) は, *tida mampoe beli* 「買う能力がない」のように -in 無しでも十分だが, 何らかの恩恵を含意する (受益者=妻) ために -in が有ると見ることが出来る。接頭辞は付いていない (ϕ -)。 (15b) は, [*jang dihiasin bendera ...*] 「... 旗で飾られた」という関係節の中に道具項の *bendera* 「旗」が組み込まれている。このような道具項は *děngěn* 「～を使って」や *měnggoenakěn* 「～を利用して」によって導入されることもある。 (15c) は, (*t)anda-tangan* 「署名」を置くトコロを表す項, すなわち位格項の *Perdjangjian ...* 「... 協定」が組み込まれている。

概ね, -in は受益・道具の機能を -kěn と共有し, 位格等の機能を -i と共有している。-in (および -i) の生産性は -kěn の生産性ほど高くはない。例えば, 1943/4/1 の紙面 2 面分で, 接頭辞と組み合わせた各接尾辞のタイプ数を示すと以下の通りである。実際のトークン数は () に入れて示す。

(16) 『共榮報』マレー語版 1943/4/1 における各接尾辞の現れ

接尾辞	接頭辞				
	měN-	di-	φ-	měmpěr-	dipěr-
-ken	57 (93)	44 (95)	18 (21)	4 (4)	1 (1)
-i	7 (15)	3 (4)	1 (1)	2 (3)	1 (1)
-in	6 (6)	3 (3)	1 (1)	1 (1)	1 (1)

この表から、(i) -kěn の使用頻度が最も高い、(ii) -i と -in のタイプ頻度は同程度である、(iii) どの接尾辞も mēN- と共起するタイプ頻度が最も高い、といったことがわかる¹⁸⁾。

この紙面で興味深いのは、接尾辞間で語基の共有が見られることである。

(17)	-kěn	-i	-in	
		<i>mělaloei</i>	<i>mělaloein</i>	「～を通じて」
		<i>měngoendjoengi</i>	<i>koendjoengin</i>	「～に訪れる」
		<i>dihadliri</i>	<i>dihadlirin</i>	「出席される」
		<i>měmpěringěti</i>	<i>měmpěringětin</i>	「～を記念／追悼する」
	<i>měněrangkěn</i>	「～を説明する」	<i>měněrangin</i>	「～を照らす」
	<i>měnjotjokkěn</i>	「～を適合させる」	<i>měnjotjokin</i>	「～に合わせる」
	<i>dikoerangkěn</i>	<i>dikoerangi</i>	<i>dikoerangin</i>	「削減される」

(17) の通り、-i と -in は、laloē 「通る」、hadlir 「出席する」、koendjoeng 「訪れる」、ingět 「覚えている」を共有し、各派生語は弁別されず互いに変異的に使用されている。一方、-kěn と -in は、těrang 「明らかな」、tjotjok 「適した」を共有しているが、各派生語には意味の区別が見られる。なお、koerang 「足りない」の場合は各派生語に意味の区別が見られない。

概ね、広告欄や中国小説欄等があれば -in の使用頻度がやや高く、逆に、

公の告知等が多ければ -in の使用頻度が低いことに加え、接頭辞を使わない φ-[語基]-接尾辞という派生形式も少なくなる傾向がある。

(15b) *dihiasin* 「飾られる」, (17) *dihadlirin* 「出席される」, *dikoerangin* 「削減される」の di- は受動形式を作る。『共榮報』では、しばしば *kēna* 「当たる、被る」とともに di- 形が用いられ、被害や迷惑が表現される¹⁹⁾。

(18) a. *marika soeda di-tipoe* [彼ら (完了) DI- 騙し] (1943/1/20)
「彼らは (金を) 騙し取られた」

b. *soemi-istri tērsēboet kēna di-tipoe oearngnja sedjoemblah f 400—*.
夫-妻 上述の (被害) DI- 騙し そのお金 総額 四百グルデン
(1943/3/27)

「その夫妻は総額四百グルデンの金を騙し取られてしまった」

Lie (1884: 24) によると、ジャカルタ・マレー語に特徴的な接頭辞 *kē/ka-* には di- の受動の機能が含まれ、di- とは違って故意ではない (“*tida dengan sengadja*”) とされる²⁰⁾。『共榮報』にも、この非意志的受動を表す *kē/ka-* が現れる。di- 形と同様、*kē-* 形も *kēna* と共起する場合がある。

(19) a. *satoe roemah (goeboek) tēlah kē-bakar* (1943/10/23)
一 家 (掘建て小屋) (完了) KĔ- 焼き

「とある家 (掘建て小屋) が焼けた」

b. *Didoega keroegian dari waroeng-waroeang jang tēlah*
想定される 損害 ~から 屋台-屋台 (関係化) (完了)
kēna kē-bakar itoe tida koerang dari f 10,000—.
(被害) KĔ- 焼き その (否定) 足りない ~から 一万グルデン
(1943/12/31)

「焼けてしまった屋台の損害は一万グルデンを下らないとみられる。」

c. *hingga polisi kĕna kĕ-tipoe 6 pestol dan [...]* (1943/1/9)

その結果 警察 (被害) Kĕ- 騙し 六 拳銃 ~と

「結果, 警察は6丁の拳銃と [...] を 不意に騙し取られてしまった」

(18b), (19bc) に見られるように, ニュース記事における *kĕna di*-[語基], *kĕna kĕ*-[語基] の表現にはふつう被害規模 (金額, 数量等) が併記される。

kĕ-[語基] と同様, *kĕ*-[語基]-an も非意志的述部を形成する場合がある。

(20) a. *itoe badjingan tida kĕ-dapĕt di antara marika* (1943/8/14)

その 悪党 (否定) Kĕ- 得る ~に 間 彼ら

「彼らの中にその悪党はいない (= 見つからない)」

b. *Thio-tjeng kĕ-dapĕt-an mĕnggletak di djoebin sĕbagai mait*

(人名) Kĕ- 得る -AN 転がっている ~に 床石 ~として 死体

(1943/2/3)

「ティオ・チェンは遺体で床石の上に転がっているのが見つかった」

Muhadjir (1981: 39) が指摘する通り, 他動詞的語基による *kĕ*-形と *kĕ-an* 形が相補的でなく, (20a) と (20b) のように両形式がある場合, それぞれの主語は [対象] と [受益者] で異なる可能性がある。(20a) の主語「その悪党」は *kĕ-dapĕt* 「見つかる」という事象における対象項であり, (20b) の主語 *Thio-tjeng* は *kĕ-dapĕt-an* 「見つかる」という事象における受益者項と見ることができる²¹⁾。(20b) の場合は, 「遺体で転がっている」ことの「発覚」という, ある種の損害を受けた被害者 (受益者) として主語の「ティオ・チェン」が置かれていると見るわけである。

Lie (1884: 25) は, 接頭辞 *tĕr-* も *kĕ-/ka-* と同様に受動の機能を持ち, 非意志的事象を表す点を示唆している。『共榮報』の *tĕr-* も同様である。*di*-形, *kĕ*-形と同じく, *kĕna* に *tĕr-* 形が続いて被害や迷惑を表現する場合がある²²⁾。

- (21) a. *kita tĕlah sangĕt tĕr-tiĕoe oleh propaganda manis* (1943/3/9)
 我々 (完了) 非常に TĒR-騙し ~により 宣伝 甘い
 「我々は聞こえの良い宣伝におおいに騙された」
- b. *Ia tjoema kĕna tĕr-tiĕoe oleh tĕrdakwa,* (1943/6/11)
 彼 単に (被害) TĒR-騙し ~により 被告
 「彼は単に被告によって騙されてしまったに過ぎず、」

ほか、ジャカルタ・マレー語の特徴として、-an のふるまいがよく取り上げられる (Muhadjir 1981: 57-62 等)。『共榮報』における接尾辞 -an は主に名詞を形成する。形容詞の比較級形、動作や状態の持続／反復形、疾患や生理現象の述部等の形成はほぼ見られない。ただし、[動詞語基]-an の形式が peN-[動詞語基]-an と同じく動作概念の名詞となる場合がある²³⁾。しかしながら、その使用頻度は peN-an 形ほどに高くない。

- (22) a. 「購入」 *bĕlian* (1944/3/18 等) pĕmbĕlian
 b. 「販売」 *djoecalan* (1943/3/1 等) pĕndjoealan
 c. 「逮捕」 *tangkĕpan* (1943/3/17 等) pĕnangkĕpan

4. 統語法

4.1 複数

Adelaar (2018: 574-575) がジャカルタ・マレー語の第四の特徴とする代名詞 *guɛ* [1 人称単数] と *lu* [2 人称単数] (福建・閩南語からの借用語) は『共榮報』では出現しない。他方、媒介マレー語 (“Vehicular Malay”) の第一の特徴 (Adelaar 2018: 573; 2005: 212-213) とされる、orang 「人」を使った代名詞複数形がある。1, 2, 3 人称複数として、それぞれ *kita(-)orang*, *kamoe orang* (*kae orang*), *iaorang* が見られるが、現代とほぼ同形の *kami* 「私達 (除

外)], *kita* 「私達 (包括), 私 (単数)], *kamoe/kaoe sekalian* 「君達], *marika* 「彼ら」の使用頻度の方が圧倒的に高い²⁴⁾。

(23) a. *Səantero malēm kita orang tida tidoer* (1943/1/21)

全～ 夜 私ら (否定) 寝る

「一晩中, 私らは寝なかった」

b. *kamoe orang haroes pěrhatikěn baek-baek* (1943/6/11)

君ら (義務) 注意する 良い-良い

「君らはよくよく注意しなければならない」

c. *iaorang bisa lakoekěn pakěrjaan-nja dēngěn laloeasa* (1942/9/19)

彼ら (可能) する 仕事-3人称 ～で 自由な

「彼らは仕事を自由におこなうことができる」

また, Muhadjir (1981: 41) が注記するように, *pada* という語²⁵⁾が動詞述部の前に (任意に) 置かれ, 主語の複数性が明示される場合がある。

(24) a. *dēngěn goembira marika pada těrdoen kēdalēm aer* (1944/9/7)

～で 嬉しい 彼ら (複数) 飛び込む 中へ 水

「彼らは喜んで川の中へ飛び込んだ」

b. *Marika pada brēnti dan bērdiri di sitoē* (1943/1/4)

彼ら (複数) 止まる ～と 立つ ～に そこ

「彼らはそこ (=美しい家の前) で立ち止まった」

c. *Toekang-toekang delman pada mēnggroetoe*

技工-技工 二輪馬車 (複数) 愚痴を垂れる

kěrna mahalnja pěrongsosan (1942/9/10)

～だから 高額なこと 料金

「二輪馬車の御者たちは (修理) 料金が高いので愚痴を垂れた」

- d. *Bĕgitoelah toko-toko di Djĕmbatan Mera dan di bĕbraĕa pasar*
 そうして 店-店 ~に (地名) ~と ~に 幾つかの 市場
soeda pada di-boeka kombali. (1942/12/26)
 (完了) (複数) (受動)-開く 再び
 「そうしてジュンバタン・メラと幾つかの市場の店が再開された。」

複数主語の述部に必ず *pada* が前置されるわけではなく、その使用はあくまで任意である。『共榮報』では、代名詞複数形 (24ab) や、複数を含意する名詞重複形 (24cd) であっても *pada* を伴わないケースの方が圧倒的に多い。*pada* が前置される述部動詞としては、 ϕ -形 (24a), *bĕr*-形 (24b), *mĕN*-形 (24c), *di*-形 (24d) 等が見られ、*pada* + 形容詞／名詞述部は見つからない。

4.2 指示詞

指示詞の *ini* 「これ」と *itoe* 「それ／あれ」は、現代の用法とは異なり、被限定の名詞に前置される場合と後置される場合がある²⁶⁾。いずれにしる、被限定名詞と指示詞が合わさってより大きな名詞句が構成される。前置・後置の順序の違いによる意味の違いは生じない。

近称の *ini* を使って参照時に近い時間を指定するとき、*ini* + 時間名詞の順序が多く見られる。以下、前置詞 *pada* 「～に」や *dalĕm* 「～(中)に」に名詞句が続く形で例示する。劣位の順序／構成を () 内に付記する。

- (25) a. *pada ini pagi* 「この朝に」 (*pada pagi ini*, 比較的多い)
 b. *pada ini malĕm* 「この夜に」 (*pada malĕm ini*, 1944/9/13 等)
 c. *pada ini tempo* 「この時に」 (*pada tempo ini*, 1943/3/22 等)
 d. *dalĕm ini djĕman* 「この時代に」 (*dalĕm djĕman ini*, 1943/12/16 等)

これらの他, *ini hari* 「この日」, *ini boelan* 「この月」, *ini taon* 「この年」

等も指示詞+時間名詞の順序を見せるが、逆順の *hari ini*, *boelan ini*, *taon ini* もかなり多い。また, *hari itoe* 「その日」のように、非近称の *itoe* を使う場合は、時間名詞+ *itoe* の順序の方がやや多い傾向にある。

時間名詞以外にも、具体名詞 (26a) や抽象名詞 (26b) に、あるいは名詞句 (26c) に指示詞が前置される場合がある。

- (26) a. *Oleh toekang kĕmasan ini itoe barang laloe*
 ~により 技工 金細工職人 この その 物 そして
di-kĕtok dĕngĕn martil, (1943/1/29)
 (受動)-叩き ~で ハンマー

「この金細工職人によりその物体 (= 手榴弾)はハンマーで叩かれ、」

- b. *Pĕndjahatnja nama Nisin dalĕm itoe pĕrkara tĕlah moengkir*
 その犯人 名前 (人名) 中 その 事件 (完了) 否定する
lakoekĕn itoe kĕdjahatan (1943/1/9)
 する その 犯行

「その事件におけるニシンという名の犯人はその犯行を否認した」

- c. *Ini kĕrtas sĕmbahjang adalah sĕtoempoek kĕrtas pĕrada poetih,*
 この 紙 折り ~である 一山 紙 金属箔 白い
 「この折りの紙というのは一山の白い金属箔であり、」 (1945/9/6)

(26a) に見られる *toekang kĕmasan ini* 「この金細工職人」では、指示詞 *ini* が後置されている。高頻度でない名詞の場合、このような被限定名詞句+指示詞の順序の方が多いようである。上述の時間名詞の場合や、*orang* 「人」といった使用頻度の高い名詞については、指示詞+被限定名詞句の順序が多いようである。

以下のように、人称代名詞も指示詞によって限定されるが、指示詞+人称代名詞という順序/構成は見られない。

- (27) a. *sěorang jang běrsimpatī těrhaděp kědoedoekan-nja bangsa Tionghoa*
 一人 (関係化) 共感する ~に対し 境遇-3人称 民族 中華
sěpěrti saja ini (1943/12/18)
 ~のような 私 この
 「この私のような華人の境遇に対して共感する人」
- b. *kaoe ini anak-nja siapa* (1943/2/23)
 君 この 子-3人称 誰
 「この君は誰の子か」
- c. *Sěorang tabib běrkata, bahoea marika itoe pasti akěn mati*
 一人 伝統医 言う (補文) 彼ら その 確か (未来) 死ぬ
 (1945/7/24)
 「ある伝統医はその彼ら (= 女子供) はきっと死ぬだろうと言った」

4.3 所有句

「媒介マレー語」の第二の特徴 (Adelaar 2018: 573) とされる所有構造, [所有者・リンカー・所有物] の順序が『共榮報』のマレー語にも見られる²⁷⁾。リンカーには *poenja* 「(持ち主), 持つ」が使われる。この構造を「リンカー所有構造」と呼んでおく。

代名詞所有者によるリンカー所有構造には以下のようなパターンが見られる。所有物を 物 で表示し, 低頻度のものを斜体で示す²⁸⁾。

- | (28) 1人称所有者 | 2人称所有者 | 3人称所有者 |
|---|--|--|
| <i>akoe/saja poenja+</i> 物 | <i>kau/kaoe poenja+</i> 物 | <i>iapoenja+</i> 物 |
| <i>kita poenja+</i> 物 | | <i>běliau poenja+</i> 物 |
| <i>kami poenja+</i> 物 | <i>(kaoe) sěkalian poenja+</i> 物 | <i>marika poenja+</i> 物 |
| <i>kita(-)orang poenja+</i> 物 | | <i>iaorang poenja+</i> 物 |

このような所有構造がある一方、リンカーの無い、所有者と所有物の順序が逆になった以下のパターンが並存している。

(29) 1 人称所有者	2 人称所有者	3 人称所有者
物 + <i>-koe/saja</i>	物 + <i>-moe/kaoe</i>	物 + <i>-nja</i>
物 + <i>kita</i>		物 + <i>bĕliau</i>
物 + <i>kami</i>	物 + <i>kamoe sĕkalian</i>	物 + <i>marika</i>

以上のような所有構造の並存により、以下のような変異が見られる。

(30) a. 「我が子」	<i>akoe poenja anak</i>	<i>anakkoe</i>
b. 「私の妻」	<i>saja poenja istri</i>	<i>istri saja</i>
c. 「君の力」	<i>kaoe poenja tĕnaga</i>	<i>tĕnagamoe</i>
d. 「彼の命」	<i>ia poenja njawa</i>	<i>njawanja</i>
e. 「私の目」	<i>kita poenja mata</i>	<i>mata kita</i> 「私達の目」 ²⁹⁾
f. 「あの方の母上」	<i>bĕliau poenja iboe</i>	<i>iboe bĕliau</i>
g. 「我々の息子」	<i>kami poenja poetĕra</i>	<i>poetĕra kami</i>
h. 「彼らの名」	<i>marika poenja nama</i>	<i>nama marika</i>

リンカー所有構造における所有物名詞としては、(30)の「子」や「目」等の他、*goeroe*「先生」、*tanah*「土地」、*oewang*「お金」、*hak*「権限」、*maksoed*「意図」、*rasa*「感じ」といった分離可能な単形態素語をはじめ、*bantoe-an*「支援」、*pĕnjakit*「病気」、*ka-ingin-an*「願望」、*pa-kĕrdjah-an*「仕事」、*pĕr-djoang-an*「鬭争」といった派生語までさまざまである。

- (31) a. *Měnoenggoe sěkalian poenja kadatěngan děngě girang hati.* (1944/9/26)
 待つ 皆 リンカー 来訪 ~で 嬉しい 心
 「皆様の来訪を喜んでお待ちいたしております。」(招待状掲載欄)
- b. *Dalěm kita poenja pěmbitjara-an sama toean Oey Tjong Hauw*
 中 私(達) リンカー 話し合い ~と ~氏 黄 宗 孝
 「黄宗孝(ウィ・チョンハウ)氏と当方との話の中で、」 (1944/8/15)
- c. *Kabarnja marika poenja pěrtjoba'an pěmbikinan soda itoe*
 ~だそうだ 彼ら リンカー 試み 製造 ソーダ その
tělah měndjadi běrhasil (1943/1/28)
 (完了) なる 成功する
 「彼らのそのソーダ製造の試みは成功に至ったそうだ」

所有物にあたる名詞が、事象を表す *kě-an* 名詞, *pěN-an* 名詞, *pěr-an* 名詞である場合, 対応する節構造の項が組み込まれる。例えば, *sěkalian*「皆」(31a), *kita*「私(達)」(31b), *marika*「彼ら」(31c) は, 対応する節構造の主語項にあたり (*sěkalian datěng*「皆様が来る」, *kita bitjara*「当方が話し合う」, *marika tjoba*「彼らが試みる」), 所有構造においては所有者として組み込まれている。また, (31b) の *toean Oey Tjong Hauw*「黄宗孝氏」は共同格項にあたり, (31c) の *pěmbikinan soda*「ソーダの製造」は目的語項(ないし補文項)にあたる (*bitjara sama toean Oey Tjong Hauw*「黄宗孝氏と話し合う」, *tjoba pěmbikinan soda*「ソーダの製造を試みる」)。

リンカー所有構造における所有者名詞としては, 2人称としても使われる *toe(w)an*「主人, あなた」, 人間を表す固有/一般名詞 (*orang*「人」, *rakjat*「民衆」, *pěmběli*「購入者」, *langganan*「購読者」) や, 組織体 (*Tionggok*「中国」, *Dai Nippon*「大日本」) をはじめ, それらを含意する *masing-masing*「各々」等が見られる。人間を含意しないような無生物所有者はほとんど見られない。おそらく, リンカー所有構造の所有者には有生性に関する制限がある。

- (32) a. *marika dapět ambil lagi laen orang poenja auto* (1943/1/16)
 彼ら (可能) 取る 再度 他の 人 リンカー 車
 「彼らは再び他人の車を奪い取ることができた」
- b. *Inilah ada Amerika dan Inggris poenja kělakoean dan kědjahatan*
 これが である 米国 ~と 英国 リンカー 行為 ~と 悪事
jang tēlah di-lakoeken kepada bangsa Asia. (1943/4/30)
 (関係化) (完了) (受動)-する ~に 民族 アジア
 「これがアジア民族に対してなされた米英の悪行なのである。」
- c. *tiap-tiap bangsa mēmboenjai hari bēsar-nja sendiri-sendiri, dan*
 毎-毎 民族 所有する 日 大きい3人称 各自 ~と
poen mēmboenjai masing-masing poenja adat-istiadat (1944/9/22)
 ~も 所有する 各々 リンカー 風俗習慣
 「各民族はそれぞれ祝祭日を持ち、各々の風俗習慣も持っている」

(32ab) の所有者 *laen orang* 「他人」, *Amerika dan Inggris* 「米国と英国」 および (32b) の所有物 *kělakoean dan kědjahatan* 「行為と悪事」の通り, 所有構造における所有者/所有物は語に限らず, 句である場合がある。

4.4 継続を表す存在動詞 *ada*

自動詞 *ada* 「ある, いる」は本来的に存在を表す。その一方で, 継続相的な助動詞として用いられる場合がある。これは, Adelaar (2018: 573) が「媒介マレー語」の第三の特徴とする, *ada* の進行用法に準じた用法である。

- (33) a. *Toean A ada mēmboeka satoe toko hasil boemi di Pintoe Bēsar.*
 ~氏 A ADA 開ける 一 店 収穫 大地 ~に (地名)
 「A 氏はピントゥ・ブサルに農作物の店を出している。」 (1943/4/20)

b. *didépan politie saksi kénalin térdakwa, jang itoe waktoe*
 前で 警察 証人 認識する 被告 (関係化) その 時
ada mēmake katja mata (1942/9/5)

ADA 身に着ける ガラス 目

「証人は、その時眼鏡をかけていた被告を警察の前で認識した」

c. *Poen doeloe ada di-bēli babi hidoep dari daerah Bandoeng,*
 ~も 昔 ADA (受動)-買う 豚 生きる ~から 地方 バンドゥン
 「昔、バンドゥン産の生きた豚も購入されており、」 (1943/12/13)

(33) の *mēboeka* 「開ける」、*mēmake* 「身に着ける」、*dibēli* 「買われる」は動的な述部だが、状態的な述部についても継続性が示される。

(34) a. *Toean A ini ada kēnal baek pada toean B,*
 ~氏 A この ADA 見知っている 良い ~に ~氏 B
 「この A 氏は B 氏をよく知っており、」 (1943/2/20)

b. *pertandingan-pertandingan ini ada térboeka goena oemoem*
 試合 - 試合 この ADA 公開された ため 一般
 「(3 日間) これらの試合は一般公開である」 (1944/7/8)

c. *pēndirian Djawa Baroe ada bērhasil diségala djoeroesan*
 創設 ジャワ 新しい ADA 成功する ~全てで 方面
 「新ジャワの樹立は全方面において成功している」 (1943/10/16)

(34) の *kēnal* 「見知っている」、*térboeka* 「公開された」、*bērhasil* 「成功する」についても、動的な述部と同様、当該の事態(状態)が生じ、その後も事態が継続した/している/することが助動詞的な *ada* によって表される³⁰⁾。

形容詞述部についても、*ada* によってその状態の継続が示される。

- (35) a. *pěrhoeboengan marika sědari lama ada baek* (1943/1/25)
 関係 彼ら ~以来 古い ADA 良い
 「彼らの関係は旧くから良好である」
- b. *Pěrhatian pěnonton, maski oedjan toeroen sědari sore-nja,*
 関心 観客 ~だけれど 雨 降る ~以来 夕方-3人称
ada bėsar, (1943/11/29)
 ADA 大きい
 「夕刻から雨が降ったとはいえ、観客の関心は大きく、」
- c. *tiap-tiap pěkěrdja'an ada moelia, asal tida*
 各-各 仕事・職 ADA 尊い ~さえすれば(否定)
měroegikěn laen orang (1944/8/17)
 損害を与える 他の 人
 「他人を害することのない限り、各職務は尊くある」

また、(32b)の例文 *Inilah ada ...* 「これが...なのである」の *ada* 「である」のように、名詞述部に先行する *ada* については、状態の継続を示しているとも、単にコピュラとして機能しているとも見ることができる。

- (36) a. *Tjoe Boen ada akoe poenja anak satoe-satoenja* (1943/10/23)
 (人名) である 我 リンカー 子 唯一の
 「チュ・ブンは私の唯一の子である」
- b. *Marika ada Tjhio Tian Hong, Ong Liang dan Tjie Sioe,* (1943/4/19)
 彼ら である (人名) (人名) ~と (人名)
 「彼らはチオ・ティアンホン、オン・リヤン、チエ・シウであり,」
- c. *haroes mēmboektikěn bahoea bėtoel marika ada pěnjokong sědjati*
 (義務) 証明する (補文) 本当に 彼ら である 支持者 真の
 「本当に彼らが真の支持者であることを証明せねばならない」(1943/8/17)

このような *ada* のコピュラ用法が見つかるとはいえ、現代と同形の *adalah* がコピュラとして用いられることの方が圧倒的に多い (26c 参照)。

5. おわりに

本論文では、1942～1945年の期間に発行されていた『共榮報』のマレー語について、その形態法と統語法の一部を明らかにした。綴り字も含め、ジャカルタ・マレー語に近い変種が顕著に使われており、「媒介マレー語」(“Vehicular Malay”)の特徴とも相俟って、紙面における口語的／非標準の特徴を成していることがわかった。

綴り字については、母音と子音それぞれの変異を、前時代のマレー語辞書や再建形等も参考に含めつつ概観した。ジャカルタ・マレー語の特徴とされる語末音節の *ë* を確認するとともに、逆に、ジャカルタ・マレー語的な語末開音節の *e* が見られず、語末の *h* の消失が優勢でないこと、声門閉鎖音が表記されていないこと等に言及した。

形態法については、動詞化接頭辞 *bër-*, *mëN-*, 受益・道具・位格的用法を持つ接尾辞 *-in*, および受動的接頭辞 *di-*, *kě/ka-*, *tër-* について、文法記述等を参考としながら、それらの変異も合わせて概観した。ジャカルタ・マレー語の特徴とされる *-in* と *kě/ka-* が確認できる一方で、接頭辞 *N-* については極めて限られていることがわかった。また、*di-*, *kě/ka-*, *tër-* による受動的述部に、被害・迷惑を示す *kěna* が前置する構文を記述した。加えて、*-an* が名詞形成に使われ、ジャカルタ・マレー語の *-an* のような比較級形、持続／反復形、疾患の述部の形成等が見られないことを確認した。

統語法については、複数標示、指示詞の用法、所有句、*ada* の継続相用法を取り上げ、文法記述等を参考にしてこれらを概観した。*orang* による複数標示、リンカー所有構造、および継続相的助動詞の *ada* は、「媒介マレー語」の特徴とされる非標準的なものであり、『共榮報』のマレー語においても確

認められた。複数性については、ジャカルタ・マレー語の特徴とも言える、*pada* を動詞に前置して主語の複数性を表す構文を確認した。指示詞については、名詞に前置・後置する構造が並存しているが、近称の指示詞 *ini* 「この～」の方が非近称よりも前置されやすく、使用頻度の高い名詞に対して前置されやすいことがわかった。所有句については、リンカー所有構造とリンカー無しの所有句の並存を概観し、リンカー所有構造における所有者に有生性の制限があることを示唆した。*ada* については、動詞述部ないし形容詞述部との組み合わせによる継続用法を確認したが、名詞述部と組み合わせられる場合は、コンピュータの *adalah* と同等である場合があることを注記した。

本論文では、*kita* 「私達、私」が複数・単数それぞれで用いられるための条件や、*kasi(h)* 「与える」を使った迂言的使役といった媒介マレー語に見られる他の特徴については取り立てて考察しなかった。これらの文法現象については別稿に譲ることにしたい。

注

*本研究は、JSPS 科研費 20H01261 「マレー語地域における言語使用実態と言語シフトの変数の研究」(研究代表者：内海敦子) および、AA 研共同利用・共同研究課題 「マレー語方言の変異の研究」(研究代表者：内海敦子) の助成による成果の一部である。

- 1) 華人向けのマレー語出版物の言語が “Chinese Malay” (Teeuw 1961: 47) と言及される場合がある (“bahasa Melayu Tionghoa” 「中華ムラユ語」, 「華馬語」といった呼び名もある)。Teeuw (1961: 47) は、20 世紀初頭以降に発行されていた *Keng Po* (競報) や、『共榮報』の前身にもあたる *Sin Po* (新報) と “Chinese Malay” を関連付けてはいるものの、言語的にはジャカルタ・マレー語とほとんど相違ないと見なしている。“Sino-Malay” 「支那マレー語」に対する 19～20 世紀の識者らの見解をまとめている Salmon (1981: 115–122) では “Sino-Malay” の存在が否定されている。Adelaar & Prentice (1996: 679) は、“Chinese Malay” と言えど、特定の方言を指すのではなく、華人によって確立された文

語体 “a literary style which was established primarily by Chinese [...]” であるとの確に指摘し、ジャカルタ・マレー語および他のマレー語変種との類似を示唆している。

- 2) 日本占領期の報道を考察した Latief (1980: 121, 129) に、『共榮報』マレー語版の記者9名について、それぞれの記者証番号、氏名、生年月日、出生地がリストされている。[68] Oey Tiang Tjoei (= 黄長水), [69] Soema Tjoe Sing をはじめ、[70] Lim Yap Tjoan, [71] Soe Lit Pit, [72] Lim Tjeng Kim, [73] Yo Tjin Kim, [74] Lauw Tian Seng, [75] Kam Tjoe Hay, [76] Lim Kok Hian の名が見られる。
- 3) 各記事の末尾に付されるイニシャルは、“Pembantoe” 「アシスタント」の場合は (Pem(b).) と記され、記者としては (A.R.) (B) (K) (L) (T) (Tj) (Y) が見つかっている。このうち (T) は [74] の Lauw Tian Seng である可能性がある。ほか、少なくとも (A.R.) および (B) に該当する記者を Latief (1980) から推測するのは限界がある。
- 4) /o/ と /u/ については、他にも taon 「年」(現 *tahun*)、Rabo 「水曜」(現 *Rabu*)、djato 「落ちる」(現 *jatuh*)、taro 「置く」(現 *taruh*) 等、数多い。続く /e/ と /i/ についても含め、Grijns (1991: 203) の “Urban Jakarta Malay dialect” に同様の交替/変異が見られる。
- 5) /e/ と /i/ については、laen 「別の」、maen 「(プレー) する」、naek 「上がる」、kēmaren 「昨日」、treak 「叫ぶ」、pēmērenta 「政府」(それぞれ、現 *lain*, *main*, *naik*, *kemarin*, *teriak*, *pemerintah*) 等、数多い。一方、e と ei については、heibat (本文参照) の他、稀に heiwān 「動物」(現 *hewan*) が見られる程度である。
- 6) 「語末音節におけるシュワーの史的維持」については Adelaar & Prentice (1996: 678) および Adelaar (2005: 205) も参照。ちなみに、(3d) 末尾に付した *rapat* は「会議」を意味するが、*rapēt* であれば「密な」を意味する。現代インドネシア語ではどちらも *rapat* となる。また、語末閉音節の母音が *ə* のものは他にも、dēmēm 「熱」、garēm 「塩」、malēm 「夜」、tēmēn 「友」、dēngēn 「～で、～と」、sēdēng 「～している」(それぞれ、現 *demam*, *garam*, *malam*, *teman*, *dengan*, *sedang*) や、dēngēr 「聞く」、bēnēr 「正しい」、dēkēt 「近い」、lēngkēp 「全て揃った」、sangēt 「とても」(それぞれ、現 *dengar*, *benar*, *dekat*, *lengkap*, *sangat*) 等、非常に多い。

- 7) 本文 (3) に挙げた語彙の再建形として, Blust & Trussel (2020) には, *dalem ‘insides’, *aken ‘on’, *datēŋ ‘to arrive’, *suker ‘trouble’ が見られる。これらは語末の母音が *e か *ē で再建されている (ただし, 「~できる」は *dapat^d に関連付けられている)。一方, アラビア語 *aʿlam* (Jones 2007: 11) からの借用の *alam* 「(経験する)」をはじめ, *ma-ka(e)n ‘will eat (?)’, *bataŋ ‘tree trunk’ などは語末の母音が *a で再建される。これらの語彙では *a が保持されたため, *alēm, makēn, batēng* といった ē による変異が無い。要するに, ē~a の変異を見せる母音は *e/ē に遡り, 変異を見せない母音とは起源的に異なるというわけである。
- 8) ē の削除については, 他にも, *praoe* 「舟」, *prēm̄poean* 「女性」, *prenta* 「命令」, *bēbrapa* 「幾つかの」, *blakang* 「後ろ」, *Blanda* 「オランダ」(それぞれ, 現 *perahu, perempuan, perintah, beberapa, belakang, Belanda*) や, *mantri* 「大臣」, *treak* 「叫ぶ」, *klamboe* 「蚊帳」, *sigra* 「すぐ」(それぞれ, 現 *menteri, teriak, kelambu, segera*) 等, 数多い。この現象に関するジャカルタ・マレー語の先行記述としては, *Ikranagara* (1980: 120) “9.3.4 Schwa deletion” がある。逆の現象として, *asli-asēli* 「本来の」の交替では, アラビア語からの借用語 *ašlī* (Jones 2007: 25) に ē が挿入された変異を見せる。
- 9) 『共榮報』では, *sapi* 「牛」および *makin* 「ますます」といった, 語中に鼻音をはさまない変異も少なくない。*sapi* については, ジャワ語 *sapi* (Pigeaud 1938: 511) からの借用語とされ (Stevens & Schmidgall-Tellings 2004: 875), 鼻音が「挿入された」のは明らかである。ジャカルタ・マレー語の語彙データを含む Brons Middel (1891: 235) の *sapi* の項には “Zie *sampi*” とあり, 19 世紀のマレー語としては *sampi* 「牛」の方が主と見なされていたことがわかる。
- 10) *joembla(h)* はアラビア語 *jumla* (Jones 2007: 137) に b が挿入された形式である。『共榮報』において, *joemlah* 「総数」のような b の無い変異 (1943/9/18 等) はほとんど見られず, 通常使われている *joembla(h)* は, ジャワ語の *joemblah* (Pigeaud 1938: 86) を範としたものと考えられる。
- 11) *watēs* という形式は, *joembla(h)* 「総数」と同様にジャワ語の *wates* (Pigeaud 1938: 614) を範としたものか, あるいはスンダ語の *wates* (Coolsma 1884: 418) を範としたものだろう。
- 12) 借用語中で子音を重ねる表記のうち, 重子音については, *dessā* 「村」(1944/8/15 等), *kotta* 「都市」(広告欄等), *kissah* 「物語」(1944/3/8 等), *oemmat* 「信徒」

(1943/9/13 等) といった, *Pewartu Selebes* (稲垣 2021: 186) と同様のものが見られる。

- 13) 語頭の s は消失せず, *saja* 「私」, *sadja* 「だけ」, *sama* 「(前置詞)」, *sampe* 「～に至る」, *satoe* 「一」, *soeda(h)* 「(完了)」で現れる。
- 14) 母音始まりの語基に *běr-* が接頭しても, *běr-asal* 「出身である」, *běr-ekor* 「尾を持つ」, *běr-isi* 「(中身が) 入っている」, *běr-obah* 「変わる」, *běr-oesaha* 「尽力する」のように接頭辞の *ě* が削除されない場合がある。
- 15) 動詞化接頭辞 *měN-* が *tj* 始まりの語基に対して鼻音代償する例は, 他にも *měnjintai* 「～を愛する」(1944/10/13 等, 現 *men cintai*), *měnjampoeri* 「～に干渉する」(1943/3/24 等, 現 *mencampuri*) 等, いくつか見られる。また, *kr* 始まりの語基に対しても鼻音代償する場合がある。語頭音節の母音が削除されて *TěR* から *TR* が生じた語基 *kriting* 「カールした, 縮れた」から *měngritingkěN* 「カールする, パーマをかける」となる例がある。
- 16) *N-* による形式は, *njělětoek* 「口をはさむ」(← *tjělětoek*), *ngětik* 「タイプする」(← *ketik*) 等, 皆無というわけではないが, 極めて限られている。
- 17) 適用接尾辞 *-kěN* の母音が *ě* /*ə*/ なのは, 例えば, ジャカルタ・マレー語を収録した *Homan* (1867) や *Brons Middel* (1891), *von de Wall* (1877-84) の *-kěN* や *-ken* といった表記から明らかである。*Grijns* (1991: 184) は, ブカシ (Bekasi) の言語変種における *-kěN* が *-in* とは違って総称的に使われる例や, より上位の社会的地位を持った受益者に使われる例を報告し, 受益機能の *-kěN* については, インドネシア語の *-kan* よりもスندا語の *-keun* と関連しているという解釈を提出している。
- 18) *-kěN* が添加していた語基を挙げると, *ada*, *andjoer*, *bahaja*, *běla*, *běrsih*, *bitjara*, *boenji*, *boetoe*, *bri*, *děngěr*, *djalan*, *djělma*, *do'a*, *enteng*, *gagal*, *gampang*, *hapoes*, *ilang*, *indah*, *kabar*, *kalah*, *kata*, *keloe*, *kiběr*, *kirim*, *koerang*, *kombali*, *kriting*, *lahir*, *lakoe*, *langsoeng*, *lětak*, *liwat*, *madjoe*, *makloem*, *měrdika*, *njanji*, *njata*, *pendek*, *pětjah*, *rěntjana*, *roeboeh*, *roesak*, *sampe*, *sědih*, *sělamět*, *sěnan*, *soekěr*, *těnggělēm*, *těrang*, *tětěr*, *timboel*, *tinggal*, *tinggi*, *tjotjok*, *toendjoek*, *toeroen* (以上 *měN-kěN*), これと重複する語基を除き, *di-kěN* が添加していたのは, *antěr*, *bagi*, *bangoen*, *běněr*, *běrdiri*, *brita*, *dapět*, *diri*, *djadi*, *giat*, *goena*, *harěr*, *iring*, *kawat*, *koempoel*, *landjoet*, *loekis*, *oemoem*, *pěrloe*, *poesat*, *sama*, *sampoerna*, *sědia*, *sěmboe*, *sěra*, *siar*, *těmpat*, *tempel*, *těroes*, *tjipta*, *tjita*, *wadjib* であった。さ

らに、 ϕ -[語基]-kĕn の形のみであったのは、*kĕnang-kĕn*, *kĕtjil-kĕn*, *oetjap-kĕn*, *sĕbar-kĕn*, *toetoe-kĕn*, *wakil-kĕn* である。他は、*mĕmpĕr-giat-kĕn*, *mĕmpĕr-goena-kĕn*, *mĕmpĕr-saksi-kĕn*, *mĕmpĕr-tahan-kĕn*, *dipĕr-dĕngĕr-kĕn* である。

mĕN-i が添加していたのは、*doedoek*, *hadĕp*, *hormat*, *koeasa*, *koendjoeng*, *lalo*, *poenja* であり、di-[語基]-i には *di-akoe-i*, *di-hadlir-i*, *di-koendjoeng-i* があり、 ϕ -[語基]-i には *klaboe-i* があり、他は *mĕmpĕr-baek-i*, *mĕmpĕr-ingĕt-i*, *dipĕr-baek-i* である。

mĕN-in が添加していたのは、*andĕl*, *lalo*, *lĕbih*, *lindoeng*, *tĕrang*, *tjotjok* であり、di-[語基]-in には *di-hadlir-in*, *di-koendjoeng-in*, *di-koerang-in* があり、 ϕ -[語基]-in には *koendjoeng-in* があり、他は *mĕmpĕr-ingĕt-in*, *dipĕr-lindoeng-in* である。

19) *kĕna* の直後には名詞が続くこともある。そのような名詞は、害やペナルティを表すものが多い: *loeka* 「傷」, *pĕnjakit* 「病気」, *ratjoen* 「毒」, *dĕnda* 「罰金」, *hoekoeman* 「刑罰」, *bom* 「爆弾」, *torpedo* 「魚雷」等。Muhadjir (1981: 123) は、巻末の語彙リストの中で “*kĕna* (vi) ‘to undergo, suffer’ (passive prefix) *kĕna pukul* ‘to be hit’ ” と記載しているが、*kĕna di-pukul* のように di- を含めた形では記述していない。

20) Muhadjir (1981: 35-36) は、ジャカルタ・マレー語における *kĕ*- 形の主語項が対象の意味役割 (“objective role”) を取るという点で文法的には di- に類似し、意味的には、「静的」「意図の欠如」「行為者の意志に反する」「突然性」を含意するという点で特異であることを記述している。同じく、*kĕ*- 形の主語項が動作主の意味役割 (“agentive role”) を取るような *katawa* ‘to laugh’ や *kĕburu* ‘in a hurry’ 等も取り上げている。

21) *kĕ*- 形と *kĕ-an* 形が相補的であれば、例えば *kĕliatan* 「見える」はあっても **kĕliat* という形は見つからない (Muhadjir 1981: 38 を参照)。主語を対象項とする *kĕ*- 形の場合、*jang* によって関係化される主語名詞句としては *sajoeran* 「野菜」(1943/12/4), *kĕtrangan* 「調書」(1944/5/6) といった無生物のものが多く、対象項の典型をうかがわせる。一方、主語を受益者項とする *kĕ-an* 形の場合、関係化されるのは *Ang K. I.* (人名, 1942/9/5), *2 orang* 「2名」(1943/1/19) といった人間名詞句が多く、受益者項の典型をうかがわせる。*kĕ-an* 形による節の受益者項は、前置詞 di 「～で/に」, pada 「～に」によって節内に組み込まれるケースが散見される。

22) *kĕtipoe*, *tĕrtipoe* 「(不意に) 騙される」のように、Muhadjir (1981: 34) では、

kəbuka, tərɒbuka 「開いている」, *kərasa, tərɒrasa* 「感じられる」, *kəpleset, tərɒpleset* 「足を滑らせる」といったペアでも意味の区別が無いとされる。ただし、*tər-*形と対応する *kə-*形が常に見つかるわけではない (**kələmbat* や **kəsərah* 等は見つからない)。

- 23) 現代インドネシア語においても接尾辞 *-an* のみによって動作概念を表す名詞が作られる場合がある。ただし, *belian* 「買った物」, *jualan* 「売り物」, *tangkapan* 「捕えた物」のように対象を表す名詞が形成される点については『共榮報』での現れと異なる。また, Muhadjir (1981: 58) は, 動作概念を表す *-an* 派生語にはその動作者項が接尾・後接形として付加されることに言及し, これは, 「～が…する (こと)」という, 語よりも上位のレベルにおける派生であると主張している。
- 24) *saja/akoe* (1人称単数), *beliau* (3人称単数敬称) に *orang* が後続して複数性が示されることはなく, *dia* (3人称単数) を使った *dia orang* 「彼ら」もほぼ現れないようである。また, *kita* が1人称単数として使われ得るのは, 「媒介マレー語」における傾向 (Adelaar 2005: 213) に沿った特徴である。『共榮報』では *kita orang* 「私達」以外にも *kita sekalian* 「私達」によってその複数性が表される場合がある。なお, *Pewartā Selebes* における“代名詞単数形 + *orang*”については稲垣 (2020: 208–209) を参照されたい。
- 25) いくつかの辞書で, *pada* は「述部の前に置かれ」“*vóór't praedicaat geplaatst*” (von de Wall 1880: 403), 「複数性を表す」“*drukt een meervoud uit*” (Brons Middel 1891: 184–185) と記述されており, *tētamoenja soedah pada datěng* 「その客人たちは既にやって来た」等の文例が示されている。この *pada* は, マラヨ・ポリネシア祖語に再建される **paRa* '(collective particle)' (Blust & Trussel 2020) および現代の *para* 「～達」との関係がうかがわれる。
- 26) 指示詞を前置する [指示詞 + 被限定名詞] の順序は, Oetomo (1991: 62) によると, “Pre-Indonesian Malay” 「前インドネシア的マレー語」と見なされる変種の特徴の一つと考えられている。
- 27) 東インドネシアの「媒介マレー語」における [所有者・リンカー・所有物] の所有構造もよく知られている。稲垣 (2020) は記述していないが, *Pewartā Selebes* においても同様の構造が見られる (*kita poenja pēpērangan* 「我らの戦争」, *Pewartā Selebes* 1944/3/9 等)。
- 28) 4.1 複数で注記した, *dia orang* 「彼ら」という構成がほぼ現れないのと

様, *dia poenja* + 所有物「彼／彼女の～」という構成もほぼ現れない。ia と dia の間に意味の違いは無いが、このような分布上の違いが見られる点は興味深い。また、2 人称単数所有者による, *kamoe poenja* + 所有物「君の～」という構成も見られない。

- 29) 『共榮報』において, *mata kita* 「私達の目」のように, 後置される *kita* は「私達」の意味で複数を指すことが多い。一方, *kita poenja mata* 「私の目」(1942/9/4) では, 前置されている *kita* が「私」, すなわち単数を指す。*kita* が単数・複数で用いられる条件については別稿に譲ることにしたい。合わせて, *kita poenja* 「私の」と *saja poenja* 「私の」の間の差異についてもここでは扱わない。
- 30) *běr-* 派生語は, 語基の表すものの存在／所有を含意する場合がある。*běr-harga* 「価値・がある」, *běr-nama* 「名前・を持つ」等である。*ada* の原義が存在／所有であることから, それぞれ, *ada* に続いた形の *ada běrharga*, *ada běrnama* との違いが一見して見出されにくい。しかしこの場合も, 「価値がある」「名前を持つ」といった状態が生じ, その後の一定の状態継続を *ada* が表していると見ておく。

参考文献

- 稲垣和也 (2020) 「『ボルネオ新聞』(1942-45) のマレー／インドネシア語における形態法についての覚書」『アカデミア 文学・語学編 (南山大学)』107 : 197-222.
- (2021) 「『プフルタ・セレベス』のマレー／インドネシア語における形態法についての覚書」『アカデミア 文学・語学編 (南山大学)』109 : 183-218.
- 津田浩司 (監修) (2019a) 『復刻 共榮報 1942 ~ 1945 第十五~三十二冊』(馬來文版 一九四二年九月~一九四五年九月), 臺北: 漢珍數位圖書.
- (2019b) 「『共榮報』 解題」, 津田浩司 (監修) 『復刻 共榮報 1942 ~ 1945 別冊: 解題・総目録』, 50-104. 臺北: 漢珍數位圖書.
- Adelaar, K. Alexander. (2005) Structural diversity in the Malayic subgroup. In Adelaar, Alexander & Nikolaus P. Himmelmann (eds.) *The Austronesian languages of Asia and Madagascar*, 202-226, Ch. 7 (Routledge Language Family Series 7). London: Routledge.

- . (2018) Dialects of Malay/Indonesian. In Boberg, Charles, John Nerbonne & Dominic Watt (eds.) *The handbook of dialectology*, 571–581, Ch. 36 (Blackwell Handbooks in Linguistics). Hoboken: Wiley Blackwell.
- & David John Prentice. (1996) Malay: Its history, role and spread. In Wurm, Stephen A., Peter Mühlhäusler & Darrell T. Tryon (eds.) *Atlas of languages of intercultural communication in the Pacific, Asia, and the Americas*, 673–693 (Trends in Linguistics. Documentation 13). Berlin, New York: Mouton de Gruyter.
- Blust, Robert & Stephen Trussel. (2020) The Austronesian comparative dictionary, web edition. Accessed August 29, 2021. <https://www.trussel2.com/ACD/>.
- Brons Middel, R. (1891) *Djoeroe Bahasa Melajoe-Olanda. Woordenlijst Maleisch-Hollandsch*. Batavia: Albrecht & Rusche.
- Chaer, Abdul. (2009 [1976]) *Kamus dialek Jakarta* (revised edition). Depok: Masup Jakarta.
- Coolsma, S. (1884) *Soendaneesch-Hollandsch woordenboek*. Leiden: A. W. Sijthoff.
- Grijns, C. D. (1991) *Jakarta Malay: A multidimensional approach to spatial variation* (Verhandelingen van het Koninklijk Instituut voor Taal-, Land- en Volkenkunde 149), Pt. 1–2. Leiden: KITLV Press.
- Homan, J. D. (1867) *Bijdrage tot de kennis van't Bataviasch Maleisch* (edited by H. N. van der Tuuk). Zaltbommel: Joh. Noman.
- Ikranagara, Kay. (1980) *Melayu Betawi grammar* (NUSA: Linguistic Studies in Indonesian and Languages in Indonesia 9). Jakarta: Badan Penyelenggara Seri Nusa, Universitas Atma Jaya.
- Jones, Russell. ed. 2007. *Loan-words in Indonesian and Malay*. Leiden: KITLV Press.
- Kwartanada, Didi. (2010) ‘Kung Yung Pao 共榮報’, ‘Oey Tiang Tjoei’, ‘Sin Po 新報’, ‘Suma Ciu Sing (Soema Tjoe Sing, L)’. In Post, Peter, William H. Frederick, Iris Heidebrink & Shigeru Sato (eds.) *The encyclopedia of Indonesia in the Pacific War*, 535–536, 567, 591, 597 (Handbook of Oriental Studies: Section Three, Southeast Asia 19). Leiden, Boston: Brill.
- Latief, Abdul. (1980) *Pers di Indonesia di zaman pendudukan Jepang*. Surabaya: Karya Anda.

- Lie, Kimhok. (1884) *Malajoe Batawi: Kitab deri hal perkataän-perkataän Malajoe, hal memetjah oedjar-oedjar Malajoe dan hal pernahkan tanda-tanda batja dan hoeroef-hoeroef besar*. Batawi: W. Bruining & Co.
- Muhadjir. (1981) *Morphology of Jakarta dialect: Affixation and reduplication* (translated by Kay Ikranagara, NUSA: Linguistic Studies in Indonesian and Languages in Indonesia 11). Jakarta: Badan Penyelenggara Seri Nusa, Universitas Atma Jaya.
- Oetomo, Dédé. (1991) The Chinese of Indonesia and the development of the Indonesian language. In Barker, Virginia M., Audrey Kahin & Suzanne A. Brenner (eds.) *Indonesia: The role of the Indonesian Chinese in shaping modern Indonesian life* (proceedings of the symposium held at Cornell University in conjunction with the Southeast Asian Studies Summer Institute, July 13–15, 1990), 53–66. Ithaca: Cornell Southeast Asia Program.
- Pigeaud, Theodore. (1938) *Javaans-Nederlands handwoordenboek*. Groningen: J. B. Wolters.
- Salmon, Claudine. (1981) *Literature in Malay by the Chinese of Indonesia: A provisional annotated bibliography* (Études insulindiennes-Archipel 3). Paris: Association Archipel.
- Stevens, Alan M. & A. Ed. Schmidgall-Tellings. (2004) *A comprehensive Indonesian-English dictionary*. Athens: Ohio University Press.
- Teeuw, Andries. (1961) *A critical survey of studies on Malay and Bahasa Indonesia* (Koninklijk Instituut voor Taal-, Land- en Volkenkunde, Bibliographical Series 5). 'S-Gravenhage: Martinus Nijhoff.
- Tsuda, Koji. (2020) *Kung Yung Pao, the only daily newspaper for the ethnic Chinese in Java during Japanese occupation: An overview*. Taipei: Transmission Books & Microinfo.
- von de Wall, H. (1877-84) *Maleisch-Nederlandsch woordenboek: op last van het gouvernement van Nederlandsch-Indie* (3 vols, edited by H. N. van der Tuuk). Batavia: Landsdrukkerij.